

男女共同参画の視点による絵本に描かれた家族像の分析

——家庭科教材としての有用性について——

An analysis of families in picture books represented the perspective of gender equality:
the availability for teaching materials of home economics education

堀内かおる（家政教育講座）

1. はじめに

家庭科における家族に関する学習では、理想の家族像を教え込むような学習ではなく、子どもたちが多様な家族・家庭の姿に気づき、自らの家族・家庭を相対化する視点を獲得することが重要である。これまでの家庭科実践では、子どもたちの気づきを促す教材の工夫が試みられてきた。例えば、写真集『地球家族』¹⁾を用いて世界の家族の暮らしぶりを観ることを通して、日本の、自分の家族との生活を振り返る学習や、家族の情景を歌った音楽を導入として用い、生徒の省察を促す学習などがある（堀内 2006）。

これらの実践において、写真集や音楽といった教材は、子どもたちの思考を自分自身の内面へと向かわせる契機となっており、子どもたちが自分自身および自分と家族との関係に改めて目を向ける手がかりとなる。

そこで筆者は、家庭科の教材として絵本に着目した。絵本とは、「子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んであげる本」だという指摘がある（松居 1978, p.3）。つまり、大人との関わりの中で、その「声」を媒介として伝わるものであり、子どもが自分で読めばよい、というものではないということになる。また、「読み聞かせ」という行為も、絵本を媒介として大人が子どもにメッセージを「伝える」ものである。

絵本は絵と文からなるものであるが、子どもは絵本の絵を読む、絵を通して物語を読み取る、という指摘（松居 1978, p.19）があるように、言葉以上に、そこに描かれている絵が多くのことを伝えている。子どもたちは、描かれているもの、色使いや、絵のタッチ、登場人物の表情などをまさに「読み」ながら、音声で語られる「声」を背景としつつ、絵本のメッセージを理解することになる。

教材としての絵本、というとらえ方をしてみると、絵本はどのような役割を持つのかといえ、決して絵本に書かれている内容を「教える」というものではないだろう。絵本には、その内容と共通する子どもの体験を普遍化するという効果がある。「読みっぱなしが原則」（松居 1973, p.15）で、あれこれ説明を加えず、その子どもなりにどう受け止めたかを大切にすることが重要となる。これは、先行の授業実践で音楽が教材となりえたように、家族について考え、語り合うための共通の空間を作る手立てとして、絵本は重要な教材となることを示唆している。

そこで本研究では、家族をテーマにした国内外の作家による絵本を収集し、それらを分析することを通して、どのような授業における教材として活用しうるかどうかが検討することとした。特に本報では、男女共同参画の視点から、性別役割分業についての現状やその克服、あるいは新しい家族の役割関係という含意を持つ絵本に着目し、考察することとしたい。

坂西と大澤（1989）は、子どもたちによって読まれている絵本を分析した結果から、「絵本が、作者の目を通して現実の社会を反映するものである以上、実生活における男性と女性の役割分担・地位・関係も多かれ少なかれ類似の状況にあると考えられる」と指摘している。絵本の中に作者のバイアスを通して潜在化しているジェンダーに基づく男女の役割観は、その絵本を手にする幼児にとっての「隠れたカリキュラム」として機能する可能性がある。ジェンダーと教育に関する「隠れたカリキュラム」への着目は、教師が無意識に使用している様々な教材の中に潜むジェンダー・バイアスの問題性を明らかにした。本研究において絵本の教材としての適用可能性を検討する際にも、ジェンダーの視点による問い直しを図りたいと考えた。

2. 絵本のテーマとしての性別役割分業

筆者は、2009年度より4年間の計画で科学研究費の助成を得て、集団としての「家族」および個々の家族構成員とその関係性や子どもの自己をテーマとする国内外で出版されている絵本を収集してきており、その中から特に100冊を取り上げて、概要を紹介する冊子にまとめた（堀内 2010）。固定的な性別役割分業の解消は、男女共同参画社会基本法で掲げられている根本的な理念の一つである。絵本の内容にも、性別役割分業に則った家族の問い直しが行われているものが散見されるようになった。次に、ここで2冊ほど取り上げ紹介したい。



図1

2-1 アンソニー・ブラウン：作、藤本朝巳：訳、『おんぶはこりごり』平凡社、2005年

アンソニー・ブラウンによる『おんぶはこりごり』（図1）は、家事をすべて母親が担っている家庭で母親が家出してしまった後、父親と二人の息子は次第に豚に変身してしまい途方に暮れていたところに母親が戻ってきて、以後は家事分担をするようになり母親も幸せになった、というストーリーである。本書の内容分析としては、翻訳者である藤本朝巳が詳しい考察を加えている（藤本 2009）が、男女共同参画という観点から本稿でも取り上げてみたい。

『おんぶはこりごり』では、なんでも母親が生活の管理をしてくれて食べて寝るだけの生活に甘んじていた父親と二人の息子たちが、やがて豚に変身してしまうのであるが、このことは文化的な生活を創造する人間らしさを放棄した帰結という暗喩とみることができる。一家の男性たちが次第に豚と化していく伏線として、絵本の頁には至る所に豚の柄が潜んで描かれることになる。例えば、壁紙のチェリーリップがいつしか豚柄になり、コンセントの穴が豚の鼻柄になり、台所の水道の蛇口にも豚が描かれている。読者は、次第に増加していく豚柄から、登場人物の行く末を予想しつつ、読み進めることができる。

象徴としての「豚」と「人間」を分かち分水嶺とは、現代文明のもとで自立的に生活を営むスキルと知恵を持ち合わせているかどうかだとみることができよう。「餌」として単に食欲を満たすのではなく味や栄養を工夫して「食事」を作って食べるという行為は、極めて文化的な行為である。母親が出ていった後、父親と息子たちはその文化的行為を行うことができず生活が破たんして、家じゅうが汚れていく。冷蔵庫の食糧が底をついてしまい、父親は、最後にこう叫ぶ。「はいまわって、くいものをさがすんだ」。この言葉は、人間性の放棄とみることが

できよう。

やがて母親は戻ってきて、改心した夫と息子を見てはじめて明るい笑顔を見せて、車の修理を行っているところで物語は終わりとなる。しかし、作者ブラウンから直接聞いたこととして、このシーンの絵には仕掛けが隠されていると藤本（2009, p.61）は指摘する。母親が修理している車のナンバーが、「SGIP321」となっているのだが、これは逆方向から読むと「123PIGS」となる。これは、「3匹の豚はまだいる」「また現れる」という暗示だと藤本は述べている。男女共同参画、性別役割分業の解消という社会的課題は、必要性・重要性は理解できても現実の生活を変えることは難しい、という含意とも読むことができる。

本書については、筆者が2005年に台湾における「両性平等教育」を調査した際に、小学校の教材として学校現場で使用されていたものであった。本書を用いた第5学年での授業の記録は、堀内（2005）にまとめられている。また、台湾における両性平等教育の実態については、劉（2006）で紹介している。

2-2 ジョナサン・シップトン：文、マイケル・フォアマン：絵、せなあいこ：訳

『ああいそがしい いそがしい!』評論社、1993年



図2

本書（図2）には、性別役割分業のもとで家事に明け暮れる母親の、終わりなき日常が描かれている。

ある日急に静まりかえった家で、主人公の男児が台所を覗いてみたら、母親が泣きながら皿を洗っていた。そこで男児が母親の涙を拭いて、「消えちゃえ、消えちゃえ」というと、母親のやっていた家事一切が消えていった、というストーリーである。

家事・育児を一手に引き受けている若い母親がいて、息子はその気持ちを理解し、一瞬の現実逃避の手助けはしても、母親の生活自体は変わらない。息子と母親の心の交流と強い結びつきが描かれる一方で家庭における父親（夫）の不在が描かれた本書には、将来に向けてのこの「家族」の展望は開かれていない。息子の愛情に支えられ、母親には性別役割分業がそのまま維持され、年月が重ねられていくことが暗示される内容となっている。

2-3 絵本における性別役割分業の描かれ方

直接、性別役割分業の解消に向けた葛藤と克服を描いたブラウンによる『おんぶはこりごり』、母子の愛があるから性別役割分業に耐えられるという含意がみられるシップトンによる『ああいそがしいいそがしい!』であるが、これら2冊はいずれも男性作家の作品である。前者は男性の視点から、性別役割分業を批判的に描いたと考えることもできよう。後者については、性別役割分業という主題は、絵本の解釈から生み出されるものであって、作者にそのような含意はなかったのではないかと推察される。これらの2冊では、登場する子どもがいずれも息子である点が共通している。

他方、これらの作品にみられるような、従来の性別役割分業をどう克服していくかというテーマ、あるいは性別役割分業を容認する内容とは異なり、性別役割分業にとらわれない新しい家族像を描いた絵本として、ケイト・バンクス：文、トメク・ボガツキ：絵、木坂涼：訳、『マ

『ママがうちにかえってくる！』（講談社、2004年、図3）があげられる。本稿では、次に本書のストーリーを概観したうえで、本書の絵と文章から伝えられるメッセージについて考察する。そのうえで、家庭科における家族学習教材としての本書の可能性について検討することにした。

3. ケイト・バンクス：文、トメク・ボガツキ：絵、木坂涼：訳、『ママがうちにかえってくる！』（講談社、2004年、図3）の概要

3-1 作者：ケイト・バンクス（Kate Banks）とイラストレーター：トメク・ボガツキ（Tomek Bogacki）について



図3

『ママがうちにかえってくる！（原題：Mama's coming home, Farrar Straus & Giroux (J) 2003）』は、2003年3月にアメリカのFarrar Straus & Giroux社から出版されている。同社²⁾は、1946年にロジャー・W・ストラウスによってニューヨークで設立され、フィクション、ノンフィクション、詩集、そして児童書を扱っている。同社の児童書部門³⁾は、1954年創業で、幼児から青少年までを対象とした絵本や図書を出版している。ケイト・バンクスは長きにわたって同社で作品を発表しているイラストレーターと組んで活躍している作家のひとりである。本書でバンクスが組んだイラストレーターは、トメク・ボガツキであった。

ケイト・バンクス^{4) 5)}は、1961年にアメリカ・メイン州で生まれ、ウェルズリー・カレッジを卒業、コロンビア大学で歴史学の修士号を取得した。ニューヨークの出版社で働いたのちに、イタリアで8年間過ごし、その後、夫と二人の息子とともに南仏に移住して作家活動を行っている。その作品は20作に及び、1998年には*And if the moon could talk* (Sunburst Paperbacks) に対し、The Boston Globe-Horn Book Awardsを受賞している。同賞は、アメリカの児童文学の分野で最も名誉ある賞とされているものである。さらに、2001年に出版された*The night worker* (Sunburst Paperbacks) は、1998年以降、毎年アメリカで出版された絵本に対し授与している文学賞であるThe Charlotte Zolotow Awardを受賞している。以上のように、ケイト・バンクスは、アメリカで高い評価を得ている絵本作家である。

トメク・ボガツキ⁶⁾は、1950年にポーランドのコニンで生まれ、現在はニューヨーク市に在住のアーティストである。ワルシャワの芸術アカデミーから現代美術の学位を得て画家として活動する一方で、その他の多様な芸術活動に携わり、グラフィック・デザインの分野ではポスターや本のカバー、レコードアルバムのカバーといった多くの作品を残している。ポーランド・テレビ局との仕事では、50本を超えるアニメーション・フィルムを製作し、ワルシャワやロンドンの劇場の舞台セットをデザインしたり、ポーランドの小学校における教育イラストレーション・プログラムの開発に参加してきた。このような多彩な芸術活動を行ってきたボガツキのイラストレーション作品は高い評価を得ており、1973年から絵本の仕事にも従事している。

3-2 本書の構成と特徴

(1) 描かれている家族像

本書に描かれている「家族」は、ペットショップを経営する母親と専業主夫の父親、乳児1人を含む3人の男児とペットの犬と猫である。犬と猫の性別は不明だが、登場人物のうち、母親以外の4人が男性である。家庭にいるのはこの4人の男性で、女性である母親は、収入を得るための稼ぎ手として、働いている。

18時を過ぎたころ、父親は台所で夕食の支度にとりかかる。同じころ、母親は、店のシャッターを閉め、帰宅の途につき、家路を急ぐ。

母親のイラストは本の見開き右側の頁に描かれ、左側の頁には、母親のイラストと対比して父親や息子たちの家庭での様子が描かれている。母親が駅に着き、階段を下りて電車に乗り、乗り換えてエスカレーターに乗って外に出て、雨の中傘を差して急ぎ足で家に向かっている時、父親はピザを生地から作り、息子たちにおもちゃを片付けさせ、食卓に皿を並べるよう指示する。二人の息子は父親を手伝って食卓を整え、母親の帰宅を待っている。やがて母親は家に着き、4人と2匹は玄関で出迎え、皆で夕食の食卓を囲むというストーリーである。

本書では、男性が外で仕事をして収入を得て、女性が家で家事・育児を行うというステレオタイプな性別役割分業が覆されている。末子が乳児であることから、父親が育児休業取得中なのかもしれない。あるいは、父親の職業は文筆業など家でできる仕事をしているのかもしれない。いずれにせよ、平日の家事の担い手は父親であるところが、本書の一番の特徴である。

翻訳者の木坂涼は、1958年生まれの詩人、絵本作家、翻訳家である。木坂は、本書について次のようなコメントを述べている⁷⁾。

初めてこの絵本の原書を見たとき、私は嬉しい驚きでいっぱいになりました。ママとパパの連携プレーぶりがいいし、街の喧騒を抜けて家路を急ぐママと、子どもとペットのめんどろを見つつ、あわただしく夕食の準備をすすめるパパの奮闘振り？ もいい。それらが交互に描かれるページ上の効果にも目を見張りました。ママが帰ってくるまでのドキドキ感、期待感も、そこに生かされています。文と絵の「バンクス&ボガツキ」コンビに、何度も拍手を送りたい思いで訳していました。

本書は、固定的な性別役割分業から解放され、家族のメンバーそれぞれが役割を担い、皆で協力して営む生活の断片がわかりやすく描かれた絵本になっている。何よりも、家族全員が集う楽しさを絵や文章から感じ取ることができる。

(2) イラストレーションの特徴

トメク・ボガツキによるイラストは、明るい色彩で生き生きとしたタッチで描かれている。表紙(図3)に描かれているのは、帰宅途中に風雨が激しくなり、吹き飛ばされそうになりながら足早に家路につく母親の姿である。前述したように左右の頁が対照になっており、同じ時間帯に父親と母親が家庭と職場からの帰り道に何をしているのかが対比されている。カラフルな色調の絵を目で追うことによって、時間の経過がわかる構成となっている。

(3) 文章表現の特徴

本書の原著では、韻を踏むレトリックが多用されている。見開きページの左右いずれかまたは両方に、必ず韻を踏んだ言い回しが現れる（表1）。

表1 “*Mama's Coming Home*”における押韻(下線は筆者による)

頁	押 韻
1	The clock goes ticktock <u>on the wall</u> . The phone is ringing <u>down the hall</u> .
4	Horns are <u>blaring</u> . Whistles <u>blowing</u> .
5	Boys are <u>sprawling on the floor</u> . Baby's <u>crawling toward the door</u> .
7	Papa's <u>rolling pizza dough</u> . <u>Laying sausage row by row</u> .
9	The dog is <u>howling loudly</u> . <u>Growling at the cat</u> .
12	People clamber off the <u>train</u> . Clouds are swelling fast with <u>rain</u> .
13	Now the dog is <u>munching</u> , <u>Crunching</u> on a bone.
14	Thunder <u>clapping</u> . Raincoats <u>flapping</u> .
15	Boys have got the table <u>made</u> . <u>Laid</u> with plates and silverware.
17	Baby's legs are <u>turning</u> . <u>Churning</u> like a riverboat.
19	Boys are <u>picking up their toys</u> . The cat is <u>licking</u> doggy's ears.
21	Little faces <u>beaming</u> . <u>Gleaming</u> in the windowpane.
22	Kisses <u>flying</u> . No more <u>crying</u> .

こうした表現がリズムカルなテンポを作りだし、母親の帰りを待つ子どもたちや父親の心の高まりとわくわくするような思いを読み取ることができる。翻訳された日本語版では押韻までは踏襲されていないけれども、「ママがおうちに帰ってくる！」というフレーズが頁ごとに繰り返され、母親の帰りを楽しみに待つ気持ちが表現されている。さらに、短く簡潔な訳文で、各場面の情景を的確に表すことに成功している。

(4) 「家族で囲む食卓」の含意について

本書は、帰宅した母親がテーブルについて、家族全員で父親手作りの夕食を食べるところで終わりになっている。本書の最終頁では、先ほどまでエプロンを着けていた父親が上着を着用しており、少し改まって席についている。母親がピザを各自の皿に取り分けており、穏やかな食事風景が描かれている。

父親は、母親の帰宅と同時に夕食の準備が完了しているように台所に立っており、家族全員で囲む食卓は、この一家のまとまりを象徴しているとも言えるだろう。また、父親の上着着用は、家族の食事を一つのセレモニーとして、大切にしたいという意識の表れだと解釈できる。

4. 児童・生徒は絵本をどう読むのか

4-1 絵本における「絵」の役割と読者に及ぼす影響

酒井（2007）は、絵本翻訳者としての自身の経験から、英文からイメージが理解できない場合に絵をよく見ると、その場面を理解するための情報が絵の中に描かれていることに気づいたと述べ、「絵本の絵と文章の相互補完関係」があると指摘する。

また、柳（2009）は短期大学生を対象として、家族構成の授業における教材としてのイラストがもたらす印象の相違について考察している。柳は、イラスト教材が文字情報に比べて共通認識を得やすいという長所を持っていると指摘したうえで、同じ家族構成でもイラストレーションによって伝わる印象が大きく異なる点を明らかにした。

柳は、「大家族（三世代家族）」「おじいちゃんと孫の二人暮らし」「（離婚した）お母さんと子どもたち」「お父さんと子どもたち」「お母さんと息子」「一人暮らし（男性）」「一人暮らし（女性）」⁸⁾ というような家族構成を示した際に、どのような場面を切り取って描いているかによって、見る者に与える印象が異なる点を指摘した。

たとえば、「大家族」の中心に女性が描かれているイラストと、男性が描かれているイラストでは、後者に対しては「男性が仕切っている。つまらなそう」という評価があったという。男性の一人暮らしを描いているイラストについては、一方のイラストが髭を生やして画板のようなものを抱えて歩く姿が描かれていることから、独身の「画家」やアーティストを想定し、自由気ままな印象を与えたのに対し、他方のイラストが、一人の男性が洗濯物を干している絵であったことから「単身赴任者」が想定され「わびしい」「さびしい」という印象を持つものが多かったという。女性の一人暮らしについても、一方のイラストが背筋を伸ばして颯爽と歩く、ショートカットにパンツルックの女性であり、他方は髪を一つに束ねてロングスカートをはき、胸の前で荷物を抱えてたたずむ女性であった。前者に対しては、「キャリアウーマン」のような快活で仕事のできる女性という印象が喚起されたのに対し、後者に対しては、「趣味に生きるおとなしい優しい人」という印象が喚起されたということであった。

以上の柳の研究から示唆されることは、イラストレーターがストーリーの内容をどのように解釈しているかによって、登場人物へのバイアスも含めて、絵には一定のメッセージが刷り込まれるということである。児童・生徒が絵本をどう読むのかを考察するうえで、絵本の主題に対して、絵本の作者がどのような見解を持って制作したのかが問われよう。先に紹介した男女共同参画による家庭生活を描いた絵本である『ママがおうちにかえってくる！』を改めて見直してみると、家事を一手に引き受け夕食の準備をする父親、仕事を終えて家路を急ぐ母親は、どちらも穏やかな表情を変えず、淡々と作業（父親）及び歩み（母親）を進めている。「必死になって努力する働く母親」の姿や「調理に奮闘する父親」というような、「気負い」がまったく感じられないイラストなのである。それは何よりも、これらのイラストには、彼ら一家にとっての「あたりまえの日常」の風景が描写されているからであろう。

家路を急ぐ母親は、雨風吹きすさぶ中にもかかわらず、表情は明るく笑みさえみられる（図3）。もうすぐ家に着いて家族に会えるという楽しい気持を表しているように受け止められる絵になっている。

イラストレーターのとメク・ボガツキがどのような気持ちで本書の絵を描いたのかは分から

ない。しかし、少なくとも、絵から受ける印象に限って言えば、「家事をする父親」を特別の存在として描いたわけではないと思われる描写となっている。

4.2 小・中学生の絵本理解に関する調査

絵本は乳幼児を対象としたものとはいえ、多くの示唆に富み、大人が読んでも感慨深いものである。小学校高学年の児童や中学生にとって、絵本は日常的に読むものではなくはなっているけれども、絵と短い文章からなるメッセージから、さまざまな含意を読み取ることが可能であろう。特に、前述したような性別役割分業や男女共同参画を主題とした絵本を取り上げることによって、読者である子どもたちのジェンダー観を浮かび上がらせることになるだろう。そこで、小学校第5学年児童と中学校第3学年生徒を対象として、男女共同参画を描いた絵本の内容理解と読後感を把握することを目的として、調査を実施した。

調査の概要を以下に記す。

(1) 実施時期と対象

2010年6月～7月に、横浜市、東京都、さいたま市下の小学校2校の第5学年児童、中学校3校の第3学年生徒を対象とした。対象者数は、小学生210名（男子110名、女子100名）、中学生268名（男子130名、女子138名）である。

(2) 調査内容と方法

調査はいずれも家庭科担当教員が家庭科の授業中に実施した。取り上げた絵本は、本稿で既述した『ママがおうちにかえってくる!』である。調査にあたり、本書と、各頁を拡大コピーしラミネートした掲示物、スライドに投影できるように画像を電子化したデータを用意した。家庭科担当教員には、本調査の意図と方法を説明し、以下の同様の手順で調査を実施してもらった。調査の所要時間は約30分間であった。

- ①児童・生徒に対し、本書を用いて初めから終わりまで読み聞かせをする。その際、学級の児童・生徒数や教室の広さに応じて、スライドを用いて拡大した画像を投影した。
- ②本書の中の特定のシーンの絵をラミネート加工したものを、黒板に掲示する。
- ③アンケートに記入させる。アンケートの内容は、特定のシーンにおける家族一人ひとりの気持ちを自由記述させるものと、この家族についての印象を選択肢から一つ選ぶものであった。

(3) 分析方法

自由記述データはマイクロソフト：エクセルを用いてテキストデータとし、テキストマイニングのフリーソフトウェアであるKH Coder⁹⁾を用いてテキスト分析を行い、構造化を試みた。4件法並びに5件法の実験によるアンケート項目については、統計パッケージPASWstatistics18 (SPSS) を使用して、分析した。

(4) 結果及び考察

1) 絵本の家族に対する印象

絵本に描かれている家族に対する児童・生徒の印象を図4～図10に示す。性別・学年別に比較したところ、8割以上の者がこの家族を「楽しい」「仲の良い」「幸せ」な家族だととらえていた。特に、小学校第5学年の女兒が突出した好感度を示し、「うらやましい家族」だとみなす割合も66%で最も高率であった。性別で比較すると、小・中学校ともに男子児童・生徒よりも女子児童・生徒の好感度が高かった。

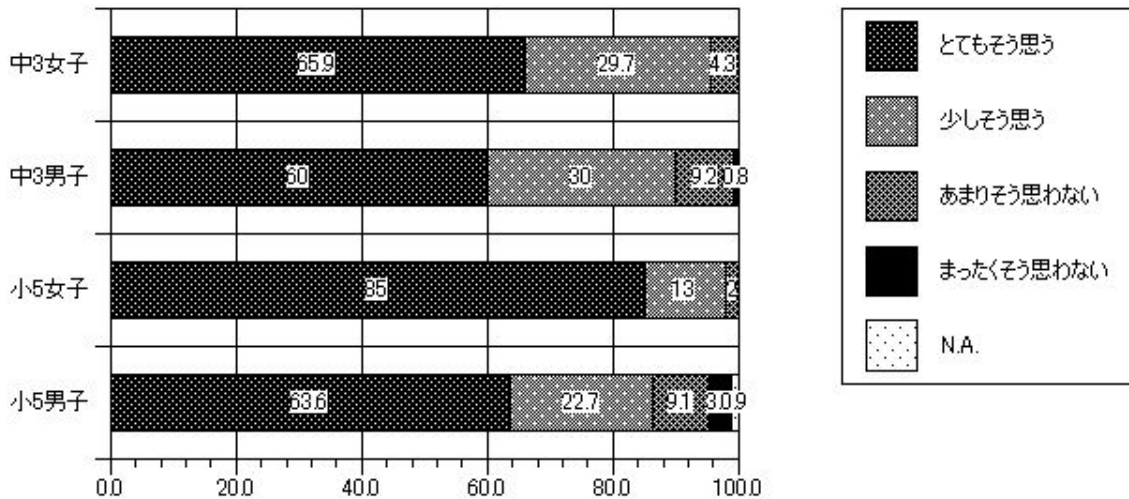


図4 楽しい家族か

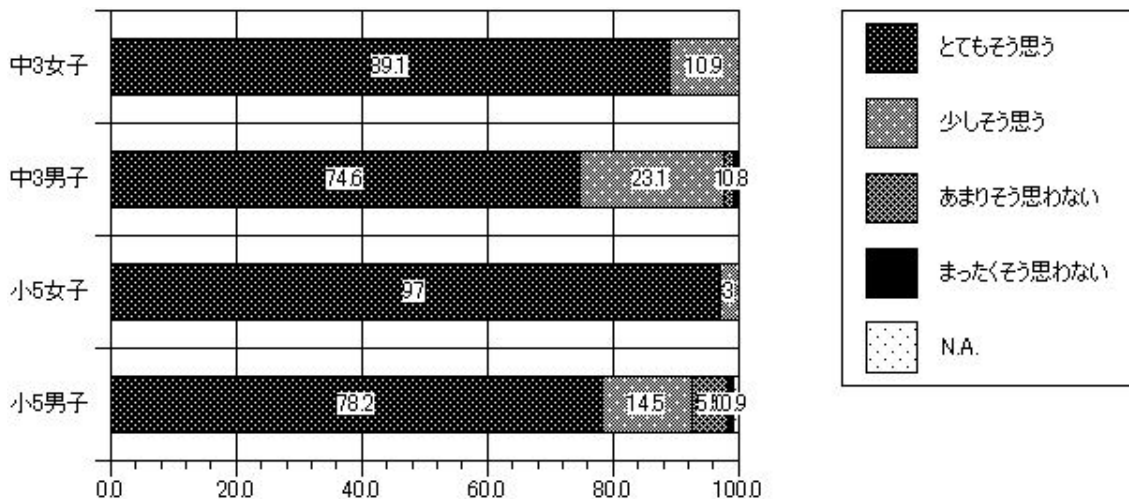


図5 仲の良い家族か

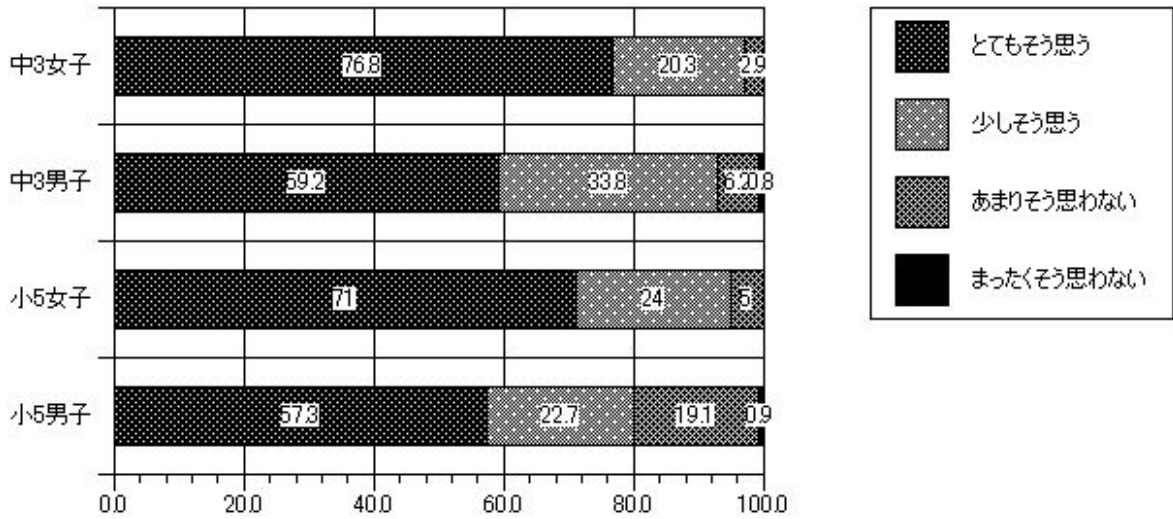


図6 幸せな家族か

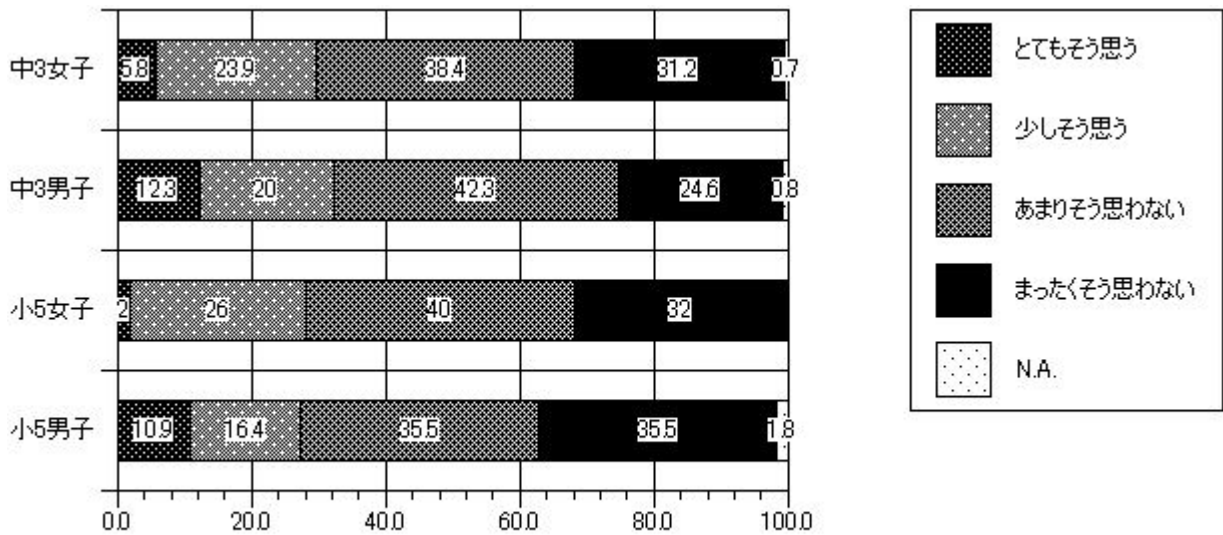


図7 不自然な家族か

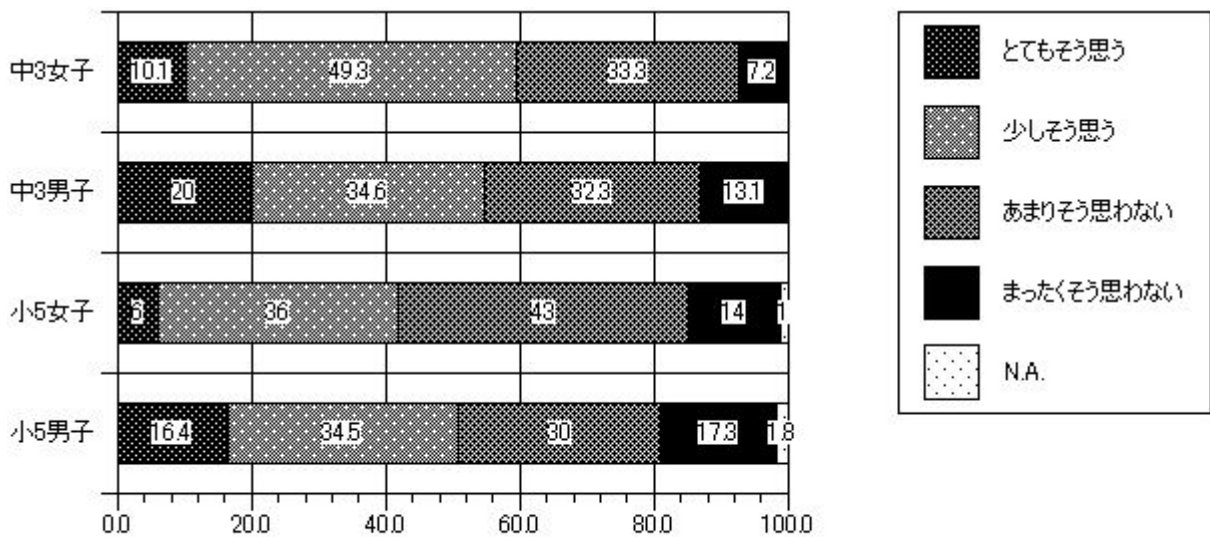


図8 珍しい家族か

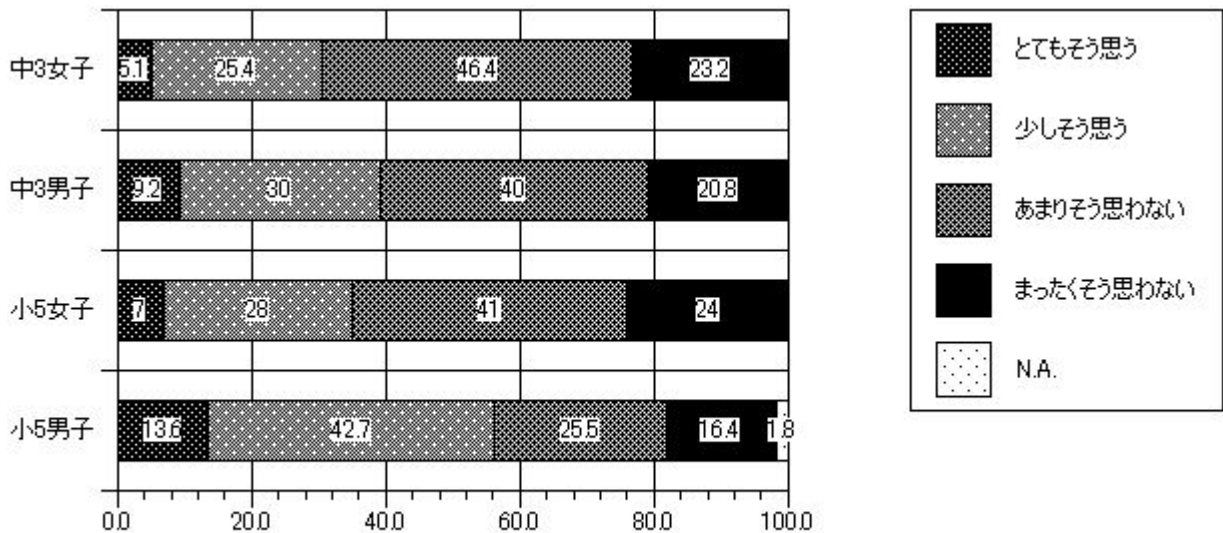


図9 大変な家族か

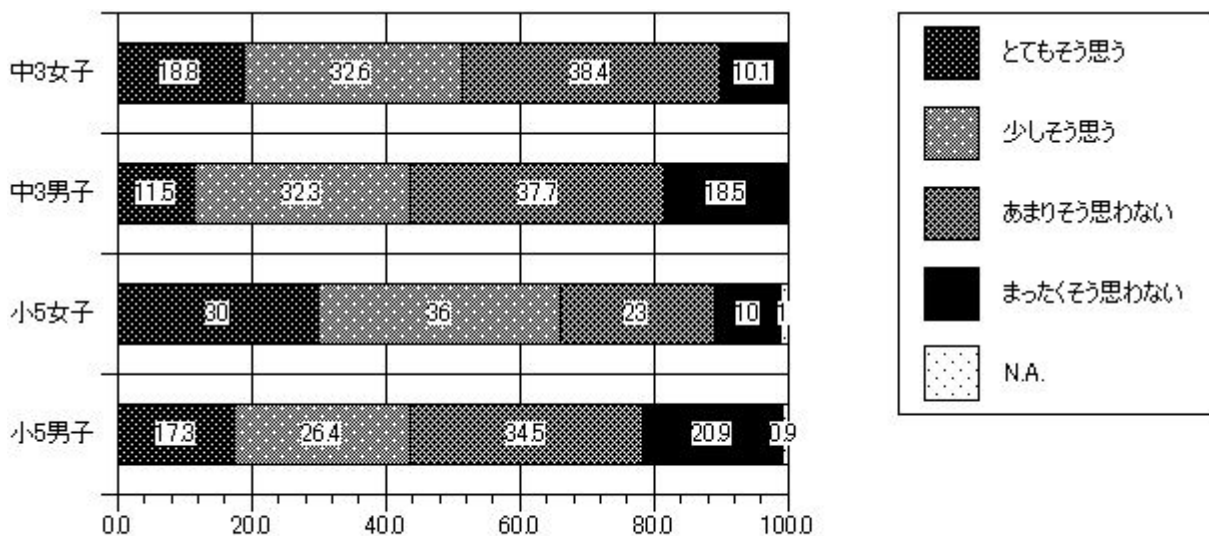


図10 うらやましい家族か

「不自然」「珍しい」「大変」な家族という印象については、「不自然」と明言する割合は「とてもそう思う」「少しそう思う」を合わせて約30%ほどであるが、「珍しい」のかと問えば、肯定する割合はやや上昇し、約4割から6割の者が「そう思う」と回答している。

ここで暗に示唆している「珍しさ」「大変さ」という状況は、父親が家において家事を行い、母親が一人収入労働に携わっている状況を意味する。今日において、実際には、このような役割分担は非常に「珍しい」ケースである。それにもかかわらず、「珍しいとは思わない」と回答した子どもたちが半数程度見られるということについて、どのように解釈したらよいだろうか。この点については、子どもたちはこの絵本の状況に依存しつつ、この絵本において「不自然」「珍しい」「大変」な状況なのかどうかという点を、読み取ったのではなかろうか。つまり、現実の家庭生活の実態からみれば、大変「珍しい」ケースであっても、絵本では「自然」な家族の形として描かれていたと読み取ることが可能と考える。

他方、小学校第5学年の男児は、他学年及び女子児童・生徒と比較して、本書に対し比較的否定的な見解を持っている。「大変な家族」だと思ふ割合は56.3%、「幸せな家族」だと思わない割合は20%を占める。「うらやましい家族」だと思わない割合も55.4%と過半数を占めている。こういったネガティブな印象がどこからきているのか、さらに考察することにしよう。

2) 父母の人物像

自由記述で、「あなたは、この絵本に登場する父親と母親について、それぞれどんなお父さん、お母さんだと思いますか。お父さん、お母さんの性格や特徴について、想像して書いてみてください」という問いを設定し、回答を求めた。記述内容をテキストデータとしてエクセルに入力したうえで、KH Coderによるテキストマイニングを試み、父親及び母親の描写に用いられている用語を分析した。アンケート調査結果から、小学生と中学生の回答傾向に著しい相違は認められなかったため、テキストマイニングにあたり、本調査の回答者である小・中学生全員のデータは一緒に扱った。

まず、父親の人物像を見るために、小中学生合計478名の父親について記述した文章で使用されている「名詞」「動詞」「形容詞」を抽出したところ、8065語が抽出された。これは、重複も含む数である。これらの用語の平均出現回数は7.00であったので、7回以上出現している用語に限定したところ、34語が抽出された。これらの用語に基づく共起ネットワークの相互関連を示したのが図11である。ここから、ある用語を用いる際に、同時に使用される傾向がある用語を読み取ることができる。頻出する用語ほど大きく、また関連性が強いほど太い線で結ばれている。父親については、「優しい」「家事」「家族」「思い」という用語と直接の結びつきが強いことがわかる。

他方、母親についてみてみると、母親の性格・特徴について述べた文章の中で使用されている「名詞」「動詞」「形容詞」に限定し抽出したところ7961語が抽出され、平均出現回数は6.03であった。そこで、出現頻度が6以上の用語に限定し抽出したところ、48語が抽出された。これらの用語の共起ネットワークを図12に示す。「優しい」「頑張る」「家族」「思う」という用語と強く結び付いており、母親の行動を示した描写として「お金一稼ぐ」という収入労働についての記述もみられる。「家族」は「働く」と結び付いており、関連性の高い用語には、家族関係内での役割が反映されていると考えられる。父親も母親も、性格特性としては「優しい」親であり、家族や子どものことを思っている。しかしその行動や役割意識には相違があり、家事をすることイコール家族への思いであり父親の優しさを表しているのに対し、お金を稼ぐこと、働くことイコール家族への思いであり優しさである母親というような明確な役割分業の表出された「優しさ」だと児童・生徒は認識していたと解釈できる。

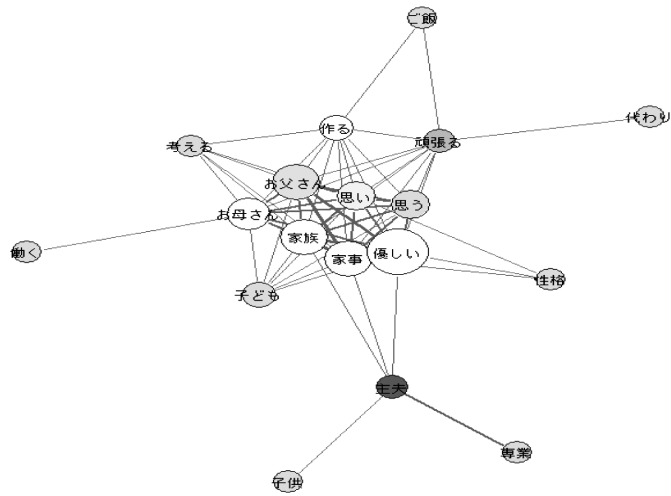


図 11 父親描写用語の共起ネットワーク（小・中学生合計）

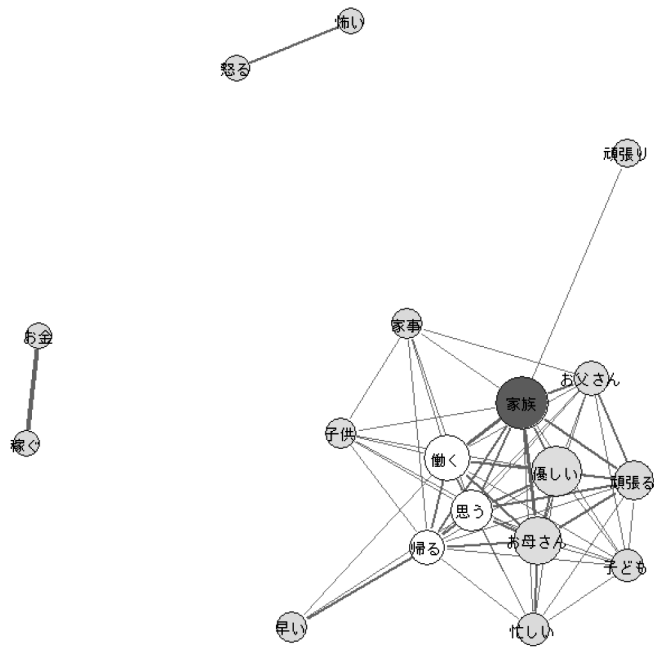


図 12 母親描写用語の共起ネットワーク（小・中学生合計）

3) 食事の支度をするときの父親の心情について

それでは次に、食事の支度にとりかかるときの父親の心情はどのような気持ちだと考えられたのか、見てみることにしよう。

小・中学生の記述を合わせて「食事のしたくを始めるときのお父さんの気持ち」についての自由記述結果をテキストマイニングしたところ、9153語が抽出された。そこで、「名詞」「動詞」「形容詞」に限定し抽出を行ったところ、平均出現回数は13.67であったため、出現回数13回以上の用語を抽出したところ、25語が抽出された。それらの用語を階層的クラスタ分析にかけた結果が、図13である。

この分析から、出現パターンの似通っていた語の組み合わせを知ることができる。つまり、同じ文脈の中に位置づけられることが多かった語がグルーピングされることになり、子どもたちが「父親の気持ち」をどのようにとらえ記述したかを把握する手がかりが得られる。張り切って楽しみながら食事の支度にとりかかる父親であり、母親（妻）の帰宅を心待ちにしながら、家族、特に妻に喜んでもらえるおいしい料理を作ろうという父親の気持ちが描写されていると解釈できる。

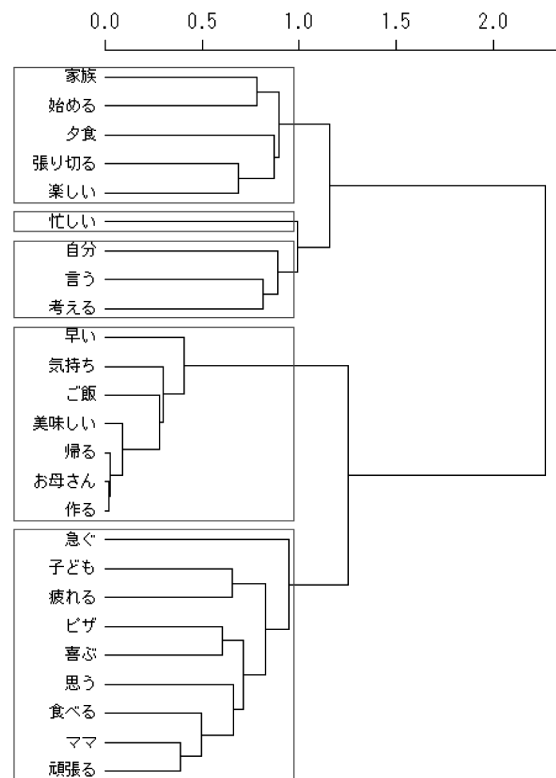


図13 夕食の支度をするときの父の気持ち

4) 『ママがおうちにかえってくる！』に対する児童・生徒の評価

アンケート調査結果より、本書に対する児童の好感度を図14に示す。

小5の女儿が突出して好意的に受け止めていることが分かる。小5の女儿においては本書が「好き」と断言している者は59%、「少し好き」まで加えれば合計75%が、本書を「好き」と回答している。小5の女儿に本書がこれほど好意的に受け止められた理由はなぜなのか、今回の調査では理由を記述させていないため、明らかにすることはできなかった。

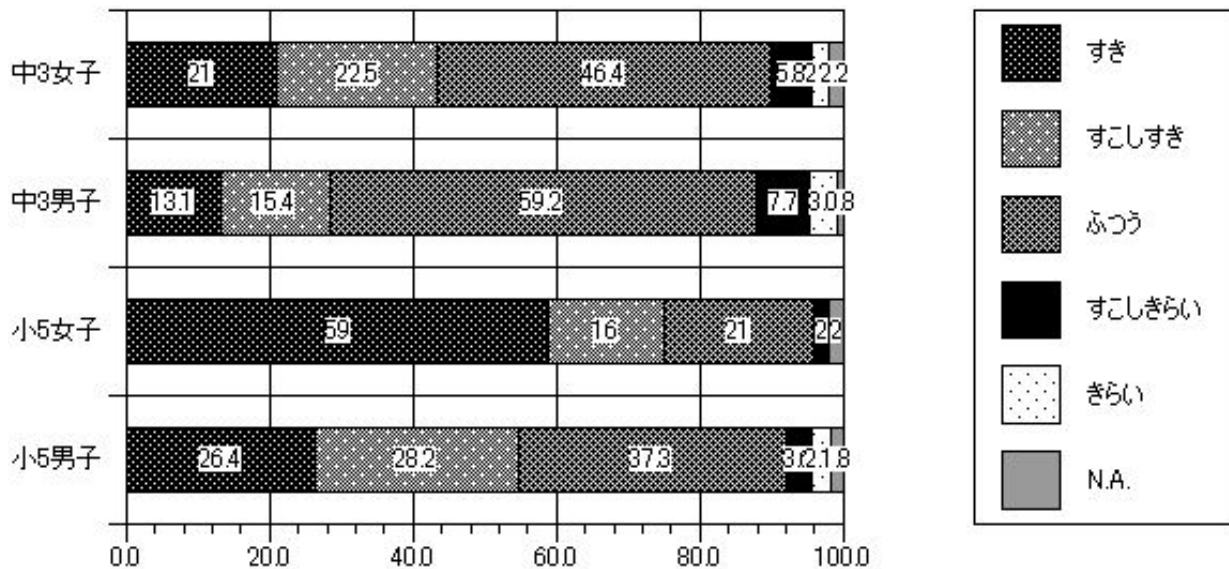


図14 『ママがおうちにかえってくる!』は好きか

5. 授業実践研究に向けての仮説と今後の展望

アンケート調査結果から、本書に対する児童・生徒の意識の傾向を把握することができたが、その意識の背景にある生活感情やジェンダー意識との関連については、考察することはできなかった。しかし、後日に本アンケートを実施した第5学年の1学級において行われた、本書の内容に関する話し合いを行った授業¹⁰⁾の展開を合わせて考察すると、今後の研究に向けた示唆が得られた。

この授業実践については、別稿で詳細を論じる予定なので多くはここに記さないが、ディスカッションの様子から、小5の女兒が本書にきわめて好意的であった理由を推察する手がかりを得ることができたのである。それは、「父親が家において、母親も早く帰宅して、家族全員で夕食の食卓を囲むことがうらやましい」という子どもたちの声が多数上がったことであり、本書が「家族の団らん」を象徴している内容と見なされた点が挙げられよう。

さらに、女兒は「料理をする父親」に対し、男児よりも受容する傾向がみられたことから、男女児童・生徒のジェンダー意識とのかかわりで、家族の役割や仕事の分担に関して取り上げ、問題提起する授業の可能性が認められた。

本稿では、家族の在り方について考える家庭科の授業のための教材としての、絵本の有用性について検討してきたが、特に本稿で着目したケイト・バンクスとトメク・ボガツキによる『ママがおうちにかえってくる!』は、性別役割分業の転換が切り口となって家族の在り方をとらえ直すための、児童・生徒への揺さぶりを喚起する教材となり得るという結論に至った。では具体的に、何を目標として、どのような気づきを促す授業を展開しうるのかという点については、今後継続する研究課題として取り組んでいきたい。

追記

本研究は、平成 21~24 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「自分の成長と家族関係を省察する小中一貫の家庭科授業開発」（課題番号 21530918、研究代表者：堀内かおる）の成果の一部である。

注)

- 1) マテリアルワールド・プロジェクト、代表：ピーター・メンツェル（1994）『地球家族——世界 30 か国のふつうの暮らし』TOTO 出版
- 2) <http://us.macmillan.com/Content.aspx?publisher=fsgadult&id=1255> 2010 年 5 月 4 日アクセス
- 3) <http://us.macmillan.com/FSGYoungReaders.aspx> 2010 年 5 月 4 日アクセス
- 4) <http://us.macmillan.com/author/katebanks> 2010 年 5 月 4 日アクセス
- 5) http://www.moritzverlag.de/index.php?article_id=175 5 月 4 日アクセス
- 6) <http://us.macmillan.com/author/tomekbogacki> 2010 年 5 月 4 日アクセス
- 7) <http://shop.kodansha.jp/bc/ehon/tokusyu/200405/index01.html> 2010 年 5 月 7 日アクセス
- 8) イラストのみならず、絵に添えられている説明文も多少、文章表現が異なる。具体的には、「大家族」と「三世代での暮らし」、「おじいちゃんと二人暮らし」と「おじいちゃんと孫の暮らし」、「離婚したお母さんと子どもたち」と「お母さんと子どもたちの暮らし」、「パパと子どもたちの家族」と「お父さんと子どもたちの暮らし」、「一人暮らし」と「一人で生活している人」（いずれも男性）、「一人で生活している人」と「一人暮らしが好きな人」（いずれも女性）のような表現になっている。
- 9) <http://khc.sourceforge.net/> 参照。KH Coder は樋口耕一立命館大学教授によって開発された、内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。
- 10) 2010 年 7 月に、本稿で取り上げたアンケート実施校の中の 1 校である X 小学校第 5 学年の 1 クラスにおいて、2 時間続きの家庭科の授業で行った実践である。1 時間目に、教師の読み聞かせの後、児童らはアンケートを記入し、2 時間目に、本書に対するフリー・ディスカッションを行った。筆者は参与観察し、ビデオカメラで授業の様子を撮影した。授業展開については、ビデオ記録を活字化しテキストとして分析資料とした。

引用文献

- 酒井麻千子（2007）「読解における絵に関する考察——絵本理解の視点から」『岩手大学英語教育論集』第 9 号、pp.1-10
- 坂西友秀・大澤広子（1989）「絵本に描写された『男らしさ・女らしさ』」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』第 38 巻第 2 号、pp.15-38
- 中川素子編（2009）『女と絵本と男』翰林書房
- 藤本朝巳（2009）「男性の身勝手と女性の自立——おんぶされてるのはどっち？」 中川編（2009）所収、pp.55-62
- 堀内かおる（2005）『台湾におけるジェンダー教育——2005 年度 台湾の小学校訪問報告』非売品
- 堀内かおる（2006）『家庭科再発見——気づきから学びがはじまる』開隆堂
- 堀内かおる（2010）『絵本に描かれた家族像——自分自身・親密な他者とのかわりを描いた

絵本 100 冊の紹介』非売品

松居直（1973）『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部

松居直（1978）『絵本を見る眼』日本エディタースクール出版部

柳昌子（2009）「家族構成の授業における教材としてのイラストの効果」『九州女子大学紀要』
第46巻1号、pp.113-126

劉盈青（2006）『台湾と日本の比較にみる小学生のジェンダー観』横浜国立大学大学院教育学
研究科 2005 年度修士論文

本書で引用した絵本一覧

ジョナサン・シップトン：文、マイケル・フォアマン：絵、せなあいこ：訳（1993）

『ああいそがしい いそがしい！』評論社

アンソニー・ブラウン：作、藤本朝巳：訳（2005）『おんぶはこりごり』平凡社

ケイト・バンクス：文、トメク・ボガツキ：絵、木坂涼：訳（2004）『ママがおうちにかえってくる！』
講談社